

石川県九谷焼技術研修所とのタウンミーティング

2019.10.9（水）15：30～17：00

石川県九谷焼技術研修所 視聴覚室

○参加者 研修生 25名

【所長あいさつ】

数多く開催されているタウンミーティングを九谷焼技術研修所で開催していただき有難うございます。研修生の中には、今日市長と話ができるということで、楽しみにして昨日眠れなかったという人もいると聞いている。今日はどうぞよろしくお願ひします。

市長から市政についてお話がある。数年後の皆さんは、おそらく作家として活躍されたりあるいは結婚されたり、介護あるいは育児をされて、いろいろな問題を抱えていると思うが、その数年後の自分をイメージしながら聞くとわかりやすい。そして、みなさんの考えを発言して行って欲しい。

【市長あいさつ】

私は、もともと九谷焼をやっていた家に生まれ、私の曾祖父が洋食器に家業をあげ、祖父がそれを大きくして、最終的には洋食器会社のOEM（Original Equipment Manufacturing、納入先商標による受託製造）をやっていた。工場はここから1kmほどのところにあったが、今はもうやっていない。私もその家業を継いで、洋食器会社で10年間くらい勤めていて、当時は商品設計をやっていた。陶磁器の作り方や、どんなものが売れるのかは少しわかっているつもりだ。どんなご質問でも構わないのでなんでも聞いて欲しい。

【市政方針説明】

- まず、九谷焼がどう移り変わってきたかという、昭和の時代というのは、作り手、売り手、買い手というのがはっきり分かれて仕事をしていた。これは九谷焼に限ったことではなく、日本のものづくりというのはほとんどこのように分かれていた。ところが大きく変化した。まず、生活様式、食文化が多様化した。例えば、今はコンビニのお弁当はプラスチックの容器のまま食べ、マクドナルドのハンバーガーもセロハンをむいてそのまま食べる。コンビニのおにぎりもお皿に載せて食べる人は誰もいない。九谷焼というのは、もともと床の間に飾るものが多いが、今、床の間のある家は少なくなった。飾る場所が少ないということ。まさに、生活様式、食文化が大きく多様化をしてきている。そして、海外品の流入も多くなってきている。最近ではヨーロッパの洋服をつくっているブランドの会社が食器、陶磁器をつくるようになってきている。さらに、販路、流通の変革で、今まではお店に行って買うとか、問屋に紹介をもらって商品を買っていたが、今はインターネットや別の次元の流通によって、世界の

商品を瞬時に買えるような時代で、まさに販路、流通の変革が起こった。売り手買い手の大きな変化が起こったのが昭和の時代。

そして、平成になって、美術工芸品の大皿や花瓶に代わって、オブジェやキャラクターものが作られるようになってきた。九谷女子とって皆さんの卒業生が作っている作品を見たが、今までの九谷とは全然違うものがたくさん作られている。作り手の変化が起こった。また、食器や日常に使うものは異素材とのコラボレーションが成され、多機能化した。ガラスと九谷焼の食器や、体の不自由な方が使うユニバーサル食器、電子レンジや食洗機を使えるものが作られてきている。ブローチやピンバッチなどおしゃれなものも作られている。その九谷焼の技術をつかって九谷ネイルがはじまったのが平成の九谷焼。

- 能美市の九谷焼に対する取組については、九谷焼資料館を昨年大きくリニューアルした。浅蔵五十吉美術館は建物が魅力あるものとなっていて、九谷焼の作品だけでなく、花や書といった他の美術品と合わせた展示を企画している。九谷焼陶芸館では、ろくろ体験や絵付け体験ができる。世界で一つしかない九谷焼をつくれる場所だと紹介している。最近では、豆皿や湯飲みだけでなく、ウルトラマンや能美市の公式キャラクターのひぼ能ん・ゆず美んやキティちゃんなどの絵付けで若い方が九谷焼に親んでもらえる場所にしようということで取り組んでいる。今年4月には九谷焼担い手職人支援工房をオープンし、この研修所を修了された方にぜひ市内で作陶活動が続けて欲しいという思いでこういう場所をつくった。この場所は作陶活動だけでなく、観光に訪れた方に九谷焼に親んでもらえる場所としたいとも考えた。東京や大阪の人、海外の方に、九谷焼がどのようにつくられているのかを実際に見て技術技能を認識してもらい、九谷焼のファンになってもらいたいという思いで設置した。

市内10の郵便局のポストの上に九谷焼の絵皿を載せるというご当地ポスト事業をやっています。全国の郵便局にはオリジナルのスタンプ（消印）があって、全国の郵便局をまわってそのスタンプを集めている人がいるそうです。ぜひ九谷焼にちなんだ郵便局ということで話題になり全国から見に来てもらいたい、九谷焼のファンになってもらいたいと思って、ご当地ポスト事業を実施した。また、能美市内の施設にはたくさん九谷焼が使われている。その代表格がふるさと交流研修センターさらいで、浴場には大きな陶額が飾られている。手洗い場には九谷焼の洗面ボウルが使われている。その他にも九谷焼が使われている施設がたくさんある。

ソフト事業では、全国から20万人弱の集客のある県内でも注目度の高いイベントのひとつである九谷茶碗まつりの開催費用として、能美市では数百万円を投資している。イオンでのプレ九谷茶碗まつりや、秋にも茶碗まつりが開催されている。また今年から、KUTANism という小松市との連携事業を始めた。とくに若手の作家の作品を皆さんに見てもらおうという仕掛けで、今回は名工の方に選んでもらった作品を浅蔵五十吉美術館と小松市のセラボクタニで展示して、好評をいただいている。これをできれば

来年も再来年も続けていきたいという思いをしている。皆さんの作品がここで取り上げてもらえるように頑張ってもらいたいと思っている。

九谷ネイルやウェア九谷を、全国、世界に発信をしていて、多くの観光客を能美市に呼び込もうとしています。

また、九谷焼を陶磁器という分野にとどめておくだけでなく、さらにいろんなところに広げていこうということでぬり絵コンテストを年に1回開催したり、いしかわ動物園の前にオブジェをつくって、能美市は九谷焼のまち、アートのまち、デザイン性の高いものがあるということをPRしている。

シティプロモーションとして、先月、市役所市民ホールでこの研修所のパーマネントコレクションを展示した。

- 最後に、令和の時代に、九谷焼をどうしていくかについては、九谷焼の技術の素晴らしさを世界に発信していくことが大切だと思っている。インスタグラムをみなさん利用されていると思うが、例えばインスタグラムを使って、ターゲットを絞ってわかる方のところへどんどん発信をしていくことが大切だし、直接見て頂ける場所を提供していくことが必要だろうと思っている。そして、異素材だけでなく、異業種とどんどんコラボレーションをしてもらって新しい九谷焼を生み出してってもらいたい。今、特に売れているのは陶額で、床の間がなくなったという話をしたが、新しい家でも壁に飾るものというのはまだ需要がある。例えば、記念品を選ぶときときなど、陶額や今までにないオブジェを選びます。それは皆さんも敏感にわかっていると思う。ぜひ、異業種とのコラボレーションを考えていって欲しい。
- このようにいろいろ取り組んでもらうことによって、能美市にもたくさん人が来てもらえるように我々も仕掛けをして、皆さんの作品に触れてもらい、売れていくようなことを考えていきたい。ぜひ、皆さんには活躍されている先輩たちに続いて、そして追い越して、能美市に住み続けて頂ければと有難いと思っている。

【意見交換】

1、賃金について

(研修生)

- 長野県出身です。能美市はとても住みやすいと感じていて、図書館をよく利用している。1年生の頃から就職活動をしているが、先輩たちの話を聞いているなかで、賃金が極端に低いというのが気になっている。能美市は九谷焼をひとつの大事な産業の柱として力を入れていると思うが、賃金が低い状態だと担い手も減っていってしまうと思う。九谷焼業界の売り上げも落ちてきていると耳にする。最低賃金にも満たない賃金で働くというのは、生活が苦しいと思う。結婚や出産、親の面倒を見るという人間として当たり前のことができなくなってしまうということはとても悲しいことだと思

う。市長には、こういうことがないように業界に働きかけをして欲しい。これから発展していくためにはぜひ取り組んでほしい。

(市長)

- 内情を教えて頂いて有難い。最低賃金を下回っているということなら、市としてしっかり見ていかなければならないと思う。それから、皆さんの作業量、作品の持っている魅力に見合った価値で取引され適切な価格で売れて行けば必然と皆さんの給料も上がっていくわけで、魅力あるものを作ってもらい、そして魅力のあるものだということを知ってもらうように、能美市としてはしっかりと取り組んでいきたいと思う。こちらの支援工房に入りますか？

(研修生)

- 就職を希望しています。

(市長)

- どこかの会社に就職するのもひとつの手だし、こちらの支援工房に入ってサポートしてもらって腕により磨きをかけて、そして頑張るというのもひとつの手だと思うので、そこは研修所の先生方と相談をして、素晴らしい人生を歩んで欲しい。

2. 九谷焼技術研修所の広報について

(研修生)

- 私は奥能登出身で、こういう研修所があることは高校生の時は知らなかった。他の高校にもこんな研修所があることを広報して伝えて欲しい。そうすれば伝統工芸の仕事をやりたい人が増えるのではないかと思う。

(市長)

- あなた自身はこの研修所に入って具体的にどんなところが良かったと思っていますか。

(研修生)

- 自分のしたいことを夢中になれてできる。そういうことを高校生に知って欲しい。

3. 九谷焼の食器について

(研修生)

- 私は食べるのが好きで外食をするが、九谷焼の器で食事をしたいなと思う。

(市長)

- 金沢にある有名な料亭は、以前は九谷焼のいい器をたくさん使っていた。ところが最近では使わなくなった。なぜかというとお客さんにその器がいいものだと言われる人が少なくなってぞんざいに扱う人が多くなってきた。昔は、九谷焼のいいものと言われる人がたくさんいたし、器も楽しむ人がたくさんいたが、最近そういう人がだんだん少なくなってきている。いい器で食べたほうがおいしいという感覚の人が少なくなってきているというのが、各料亭で九谷焼を使っているところが少なくなっている要因。みなさんからも、いい器で食べると美味しい、雰囲気も良くなるということをぜひ発信して欲しいと思っている。

レストランに行く時にあそこは食器がいいから行こうと思う人が何人いるかということ。やはりまた行こうという時は美味しいからとか、サービスがいいから、かっこいいからということだと思う。今は、器にも趣向を凝らしていくように変わってきている。そんな視点で見たい。

4. 九谷焼のイベントについて

(研修生)

- この前、秋の陶芸村まつりに参加して、研修所の皆さんと自分で作った器を売る機会があった。この陶芸村でまつりは春と秋にあると思うが、それだけでなく盛り上がるおまつりなどは他にもやっていますか。

(市長)

- まず、陶芸村に来てもらえるまつりはその2回だけ。
- その他の場所で九谷焼を紹介している場面があって、県内のイオンで紹介をしたり、2月に東京ドームの隣のプリズムホールで石川県の伝統工芸フェアで紹介している。陶芸村に来てもらう機会というのはたくさんないが、陶芸村に来てもらわなくてももっと売れていくような仕掛けを重視すべきでないかと思う。皆さんの作品は、九谷焼のことをわかる人が選ぶのではないかと思う。家族連れでお祭りを楽しみたいという人達に、皆さんの作品を見て買うという人はそれほど多くないのではないかと思う。それよりも、皆さんの作品を見ていいなと思う、そんなターゲット層に対してどうやって訴えていくかということの方に力を注ぐべきではないかと思っている。それがインスタグラムとか、固定客やツアー客といった、良さの分かる人をどうやって呼び込むかということが、皆さんの作品が売れていくことだと思っている。そんなことをやっていきたいと考えている。

5. 九谷焼について

(研修生)

- 私がこの研修所に入ったのは、陶芸を少ししてしまっていて、レベルの高い所で学びたい

と出てきた。

- 私は羽咋から来ていて、今は能美市内のアパートに住んでいるが地域のイベントチラシがよく配布される。能美市は活発なところだと羽咋市との違いを感じている。
- この年齢なので、もう就職は難しいと思っている。自宅に設備を持っているので、ここで学んだことを続けていきたいと思っている。九谷焼の定義はどうかかなと思って、羽咋で作っても九谷焼と呼んでもらえるのか、もしダメなら能美市に住んで九谷焼という名前で続けていくかと思ったりして、将来どうなるかまだわかりません。

(市長)

- 逆にお聞きしたいのは、そもそも、どんなものを九谷焼と呼ぶと思いますか。

(研修生)

- ここに来て何人かに質問したが、土がこの辺りのものでつくるとか、金沢市より南でないと九谷焼と呼んでもらえないとかいう話は聞いたが、私も詳しいところはわからない。

(市長)

- 九谷焼ってどんな焼き物ですかと聞かれたときに、明確に答えられる回答を持ち合わせていない。こちらの土を使っているとか、絵の具はこんな絵の具であるとか、定義があるようですが、出来上がったものが九谷焼かというとは全然違う感じのものもある。

(研修生)

- 五彩でなく真っ白の作品でも九谷焼として出ているものもある。

(市長)

- かえってそちらがヒントなのかもしれない。本当に九谷焼らしさのものを今の現代風にアレンジして出すと売れるかもしれない。徳田八十吉先生の九谷五彩を釉薬をとおして艶やかに見せるという独特の技法が、あれだけの価値を作り出したのだと思う。福島武山先生は赤絵を極めて、細描の一本一本で表現されている。まさに九谷焼の真髄を磨き上げたものこそが、今世の中から支持されているのではないかと思う。

(研修生)

- 九谷茶碗まつりは家族連れが来てかわいいとか使い易いというものを見て行かれる。やはりそうだと、九谷焼をわかる人と呼び込むということをして頂きたい。

6. 陶芸村のビジョンについて

(研修生)

- 私は金沢市から車で通っているが、陶芸村にたくさんお店があるということを知らなかった。そこがすごくもったいない。この陶芸村のビジョンなどをお聞きしたい。

(市長)

- もっと宣伝をしていく必要があると考えている。しかし、なかなか一気にやれないこと。去年は九谷焼資料館をリニューアルした。予算が必要なもので議会の承認を得ないと進められないのでお話しできないが、ここにある施設を順次新しくしていくつもりで、九谷焼資料館という名称も変えたいと思っている。ここにある施設を一緒に変えて、マスコミや雑誌に取り上げてもらって知名度を高めていきたいと考えている。九谷焼陶芸館では世界で一つしかない九谷焼が作れる。そんな場所というのを皆さんにあまり知られていない。特にこれは日本人だけでなく海外の人達、オンリーワンを求めている人達に、PRできるのではないかと考えていて、それを仕掛けようとしている。皆さんたちにもその担い手になって欲しいと思っている。今、旅行に行くとき、行先を旅行会社やパンフレットで探すのではなくて、SNSをとおして口コミで選んでいる。皆さんにはインフルエンサーになってもらい、フェイスブックやインスタグラムなどでどんどん写真を撮ってもらって、記事を書いてもらって、発信して広げて頂きたい。

(研修生)

- 私たちの作品を買ってもらえる人に宣伝していくこと、入学式でも技術だけでなくマーケティングが大切とお話しして頂いた。陶芸村をリニューアルされて、どの層をターゲットにしていきますか。若い世代ですか。

(市長)

- 若い世代でも、「物」ということに対して興味を持っている人たちにどんどん発信をしていきたい。今はブランド名があって食器が並んでいるデパートは無い。新宿の伊勢丹でも日本橋の三越でも高島屋でもみんなごちゃごちゃに置いてある。物の発信する魅力だけで皆さん買っている。六本木のアギト、丸の内にあるサザビーなどのコンセプトショップに物を買いに来るといった人たちが見られるところに置かないとたぶん発信されていかないと思う。その物の価値がわかるような層、年齢でなくて生活層だと思っている。例えば雑誌だったらC a s a BRUTUS（カーサブルータス）とか婦人画報などを見ている層の人達、デザイナー系の人達が読むような雑誌に出してもらい、アピールしていかないと、皆さんの作品を発信できないと思う。そんなことのお手伝いをしていきたい。

7. SNSの活用について

(研修生)

- 九谷焼は色鮮やかできれいだと思うので、宣伝次第ではブームを起こせると思う。でも、ブームはすぐ過ぎ去ると思う。インスタグラムブームがあるうちに九谷焼ブームを起こしたい。どうしたらいいのかと思う。九谷焼のウルトラマンなどはいいいアイデアだと思う。

(市長)

- ミッキーマウスもミニーマウスもある。

(研修生)

- ディズニーランドへいったら九谷焼があつて、驚いた。
- 私の思う能美市のいいところは、九谷焼をする環境はすごく整っているところと、能美市は、介護おむつと赤ちゃんのおむつの助成券がある。私は七尾出身ですが七尾にはないので、私がここに住んだら育児もしたい。それまで続けて欲しい。ドラッグストアに行っても赤ちゃんのコーナーが広い。こういうところが住みやすさ8位だと思う。

8. 将来のことについて

(市長)

- ここを卒業された人は空き家を利用して窯をおいて活動されている。皆さんもそんなスタイルを考えているのか。

(研修生)

- そんなところを探そうかなと思っています。

(研修生)

- もともこの研修所に入った時には、九谷焼の会社で仕事ができればと思っていた。ここに入って、職人か作家と言われるといままでそういうことは考えていなかったのので、九谷焼に関する仕事ができればいいなと思っている。これで独立しようと考えていたわけでないので、どちらの志望かときかされると迷ってしまう。

(市長)

- 工房に入ることは考えていませんか？

(研修生)

- 何年か就職して、マーケティングのことも知りたい。それを経て、支援工房にお世話になるというのもあると思う。最終的には自分のペースで作陶したいので、古民家を改修してやるのは素敵だと思う。

(市長)

- 自分で作品をつくろうとした時に、花や動物や自然景観などの題材になるものが必要だと思うが、そういった意味で能美市にはたくさんあると思う。作陶活動をするうえで能美市はいい環境ではないかと思う。

(研修生)

- 環境は整っていてすごくいいと思う。研修所も高くない授業料だから有難い。市の支援は十分されていると思う。あとは、自分の資金力だと感じている。窯を買うにしても家を建てるにしても、賃金が低いということで行き当ってしまう。実際、家族を養えないから転職したという方もいた。窯の技術を継承していくためにも、資金の問題は解決されていって欲しい。将来まだ決めていない人もいるが、選択肢の一つとして、いったん就職できるというのがあるのとないのとでは大違いだと思う。先生に聞くと、求人が今年はまだ1件も来ていないということだった。

(市長)

- いい職人さんがなかなかいないという声も聞く。

(研修生)

- 窯の技術というものが継承されない。ずっと勤め続けられる環境が無いと職人も育っていかないと思う。雇い主から見れば技術が低いのにお金は払えないということらしいが、そういう考えは古いと思う。それを私たちでは立場が弱いので訴えていけないので、市長の方から改革してもらわないと良くならないと思う。技術を継承していい職人を育てるという意味でも、作家と職人と両方の道があることが大切。

(市長)

- やはり、しっかりとマーケットに価値を認めてもらって、対価を支払ってもらおうということで技術も継承され、作家も職人も育っていくと思う。能美市にとって九谷焼は重要な産業のひとつで、我々は九谷焼の魅力をマーケットに発信をしていくことのお手伝いを一番していきたいと考えている。そのやり方はいろいろ難しさがあるので、ぜひ皆さんにも協力して欲しいと思っている。今のご意見は承りました。

(研修生)

- 私も今年度卒業したら就職を考えている。県外出身ですので家を借りて生活してくるとなると、先輩方から聞いた給料だと、家賃と年金を払ったら厳しいなという状態になると思う。就職して、マーケットなどの勉強をしながら独立に向けた資金を稼ごうと思っていたが、毎月毎月が精いっぱいとなりそうで、他のアルバイトもするとなったら自分の制作のために割く時間もなくなってしまう。将来、視野を広くして考えてみようと思っているところ。実家に戻って制作すれば家賃の分の余裕が出るので、そう考える人も出てくるだろうし、そんな面で能美市を離れてしまうきっかけになってしまうと思う。

(市長)

- 作品を作り続けていくためには、窯が必要になりますよね。

(研修生)

- 窯を買うということになると思う。材料も産地から取り寄せて買うことになる。もう少しで卒業となると、どういう方法が一番いいのかと考えている。

(市長)

- 我々とする、ぜひここにいてもらいたいなという思いの中で、やれることは少しずつやっているつもりですが、生活が苦しいという話になるとやれる範囲というものが限られてくる。能美市でやっていってもらえるように考えてもらいたい。

【市長閉会あいさつ】

いろんな悩みや課題を直接お聞きすることができて貴重な機会になった。九谷焼だけでなく、いろんな業界が変革をしている時代です。大量につくって大量に売れていた時代もどんどん変わってきていて、そんな中でいかに魅力あるものを、個性を活かして取り組んでいくかということが、九谷焼業界だけでなく全ての産業に言えることだと思う。能美市としてできるだけ皆さんの応援をしていきたいと思うので頑張ってもらいたい。今日言い足りなかったことは、技術指導課長や所長に伝えてもらって、ぜひ何なりとお声を聞かせて欲しい。それから、いかにして発信していくかということがとても大切なので、これも皆様のご協力をお願いします。今日はありがとうございました。